



えんじゅ

春日市立春日小学校

校長室便り No.15

令和2年11月9日

文責：校長 福島

「強いチームには対話がある」

修学旅行に行ってきました。

学校を出発して、私は運転手さんの後ろに座っていました。まずはバスガイドさんと運転手さんに挨拶をするのが恒例です。代表の子供が挨拶をしました。「すばらしい！」運転手さんが思わずつぶやきました。バスの後方からでしたがマイクも使わずはっきりした声で、学級のみんなを取り込みながら笑えるところもある見事な挨拶でした。ガイドさんがほめてくれることはありませんが、運転手さんがつぶやくほどのあいさつでした。

この例のように、修学旅行では多くの方から「すばらしい子供たちですね」という声をいただき、誇らしかったです。私から見てもすばらしい自慢の6年生です。

2日間「何が子供たちをここまで高めているのだろう」という思いで過ごしました。様々な要因はありますが、大きな要因が「子供たちの中に対話がある」ということです。

帰校して到着式が始まる前に、リーダーの1人が学年全体に向かって「みんな帽子を取ろう」と気づきを声にしました。「ありがとう」たくさんの声が返ってきました。このような対話が、グループや学級、さらに学年全体の場でも頻繁に行われています。安心して思ったことを友達に伝えています。しかも、相手を否定する言葉が極めて少ないこともこの学年の特徴です。教師のきめ細やかな指導をもとに、今子供たちは教師の手から離れたところで「対話」を基盤に集団の力を自分たちで高めていることを確信しました。

「強いチームには対話がある」これは私の経営理念の中核となる考え方です。ソフトバンクホークスが優勝しました。工藤監督も対話を重視しています。今シーズン楽天からソフトバンクに移籍した平石コーチは「ホークスには常勝チームとしてのDNAが流れている」(西日本新聞から)と言っています。選手の高い意識やコミュニケーションの量と質のことだと私は思いました。

写真の折鶴リースは、フィールドワーク出発前にある子供が見せてくれたものです。山里小学校に納めるためにグループみんなで作ったそうです。学校全体で千羽鶴を作り平和集会で納めますが、それ以外に鶴を作って納める子供には初めて出会いました。きっとグループで素敵な対話があったことが想像されます。

卒業に向けて、子供たちは対話を重ね、春日小に「よい子が育つDNA」を残してくれることでしょう。



強いチームに対話があるように、対話がある家族は絆が深まり、子供の自尊感情が高まるのではないのでしょうか。お子様の話に耳を傾けていますか。あたたかい言葉をかけていますか。